主イイススハリストスの降誕祭聖体礼儀

単音聖歌譜

司祭祈祷

注意　譜面中、五線譜上に ||O|| とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈祷文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないようにしてください。

2025 年 12 月 20 日　改訂

釧路ハリストス正教会
管轄司祭ステファン内田圭一

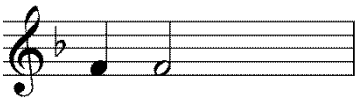
司祭)（ 黙誦：天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、滿たざる所なき者よ、萬善の寶藏なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救い給え。

至と高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人に惠は臨めり、至と高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人に惠は臨めり、

主よ、我が唇を啓けよ、然せば我が口は爾の讃美を揚げんとす、

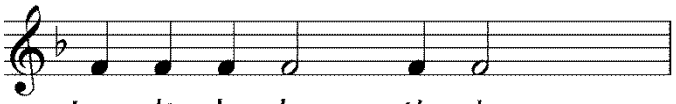
我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 ）

司祭) **父と子と聖神の國は崇め讃めらる、今も何時も世世に、**

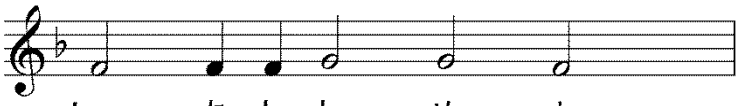


【 大聯禱 】

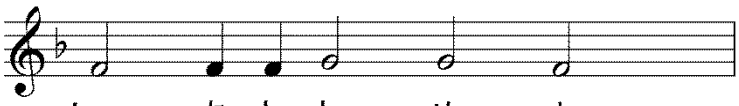
司祭) **我等安和にして主に禱らん、**



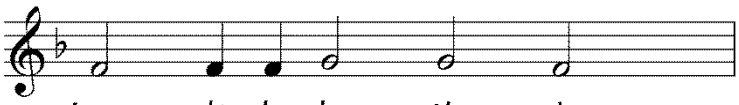
司祭) **上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、**



司祭) **全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、**

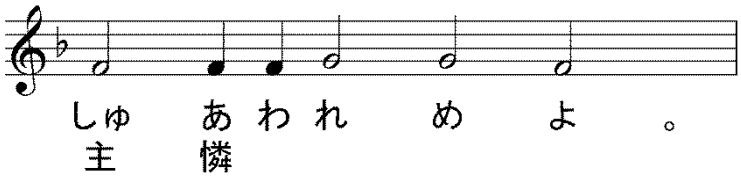


司祭) **此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に來る者の爲に主に禱らん、**

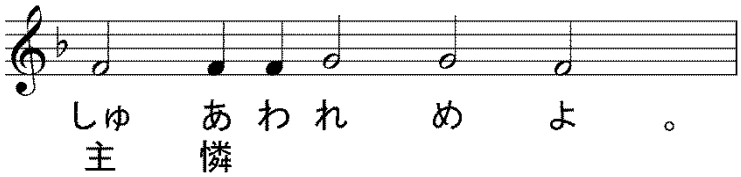


司祭) **教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、司祭の尊品、ハリス**

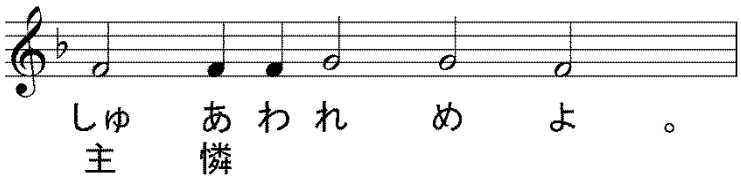
トスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



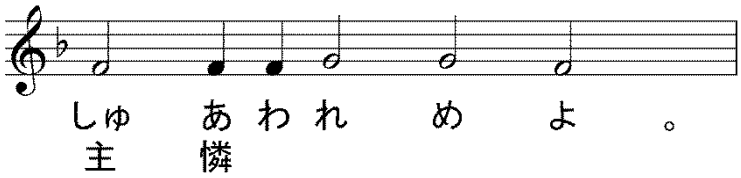
司祭) 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



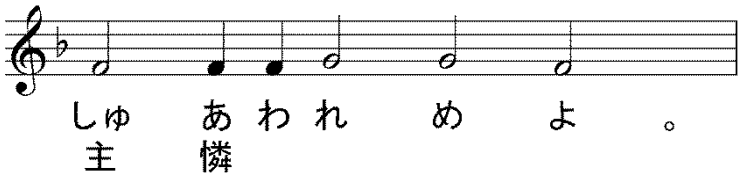
司祭) 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



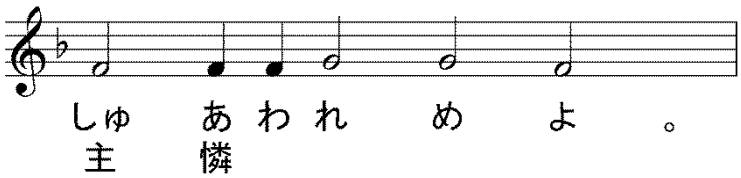
司祭) 氣候順和、五穀豐穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



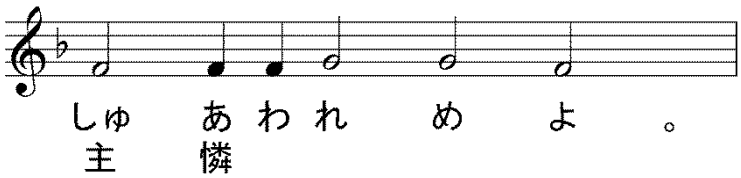
司祭) 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び彼等の救の爲に主に禱らん、



司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、

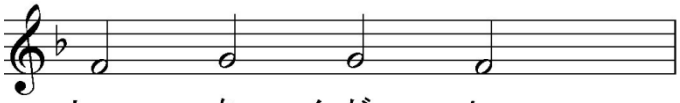


司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、



司祭) 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

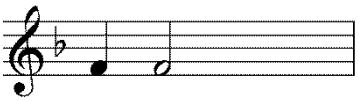
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ　な　んぢ　に　。
主　爾

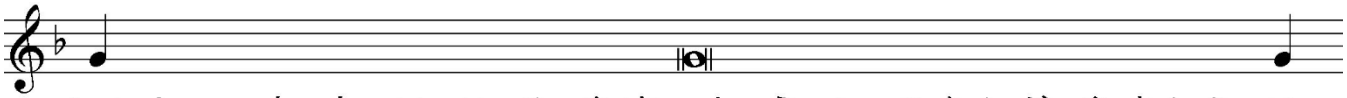
司祭)（　黙誦：主我が神よ、爾の權柄は像り難く、光榮は測り難し、爾の仁慈は限り無く、仁愛は言い難し、求む主宰よ、爾の慈憐に因りて、親ら我等と此の聖堂とを眷み、我等及び我等と偕に禱る者に爾の豐なる恩澤と爾の愛憐とを施し給え、　）

司祭)　蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

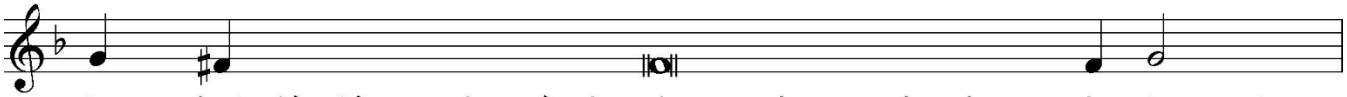


ア　ミ　ン。

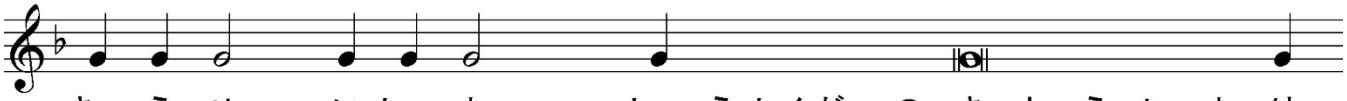
【　第一アンティフォン　】



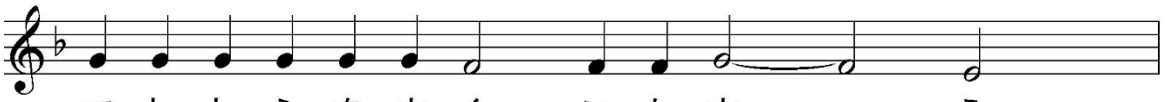
しゅよ、われこころをまっとうしてなんぢをさんえい
主　我　心　全　爾　讚榮



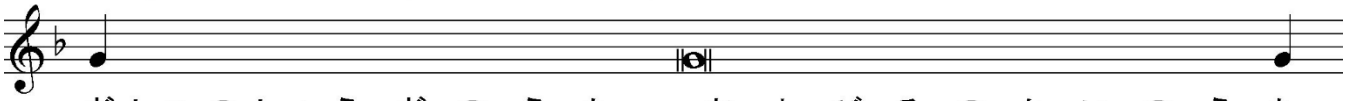
し、なんぢがことごとくのきせきをつたえん。
爾　悉　奇迹　傳



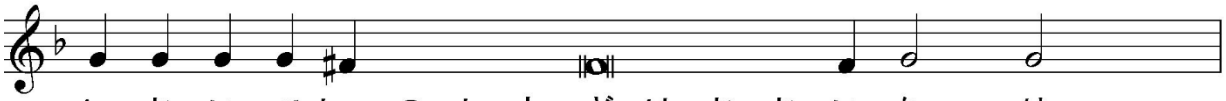
きゅうせいしゅよ、しょうしんぢょのきとうにより
救　世　主　生　神女　祈禱　因



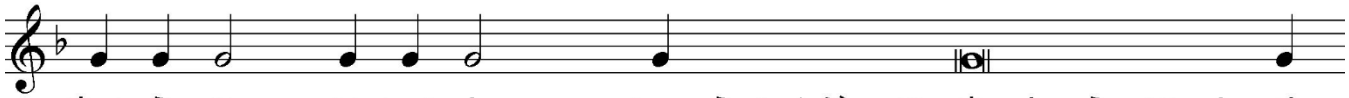
てわれらをすくいたまえ。
我　等　救　給

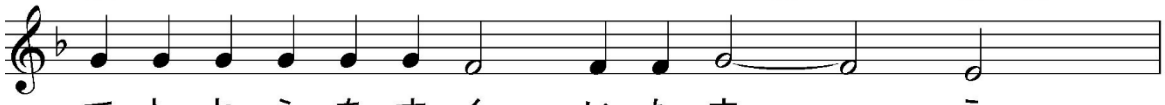


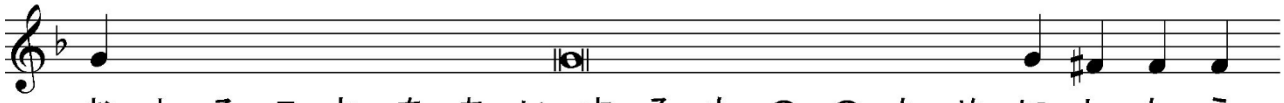
ぎしゃのしゅうぎのうち、およびそのかいのうち
義者　集　議　中　及　其　会

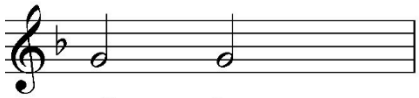


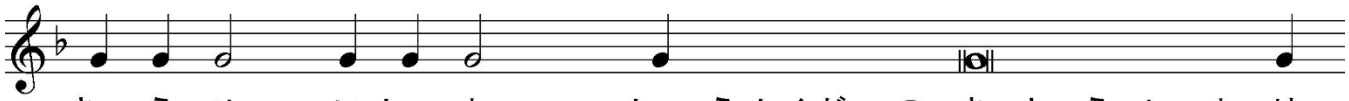
においてしゅのしわざはおおいなり。
於　主　所爲　大

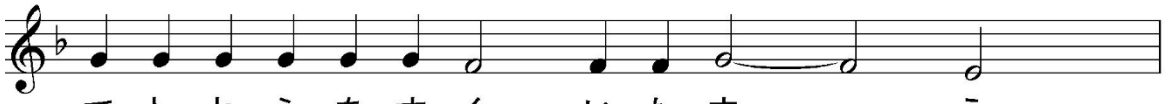

きゅうせいしゅよ、しょうしんぢょのきとうにより
救世主生神女祈祷因

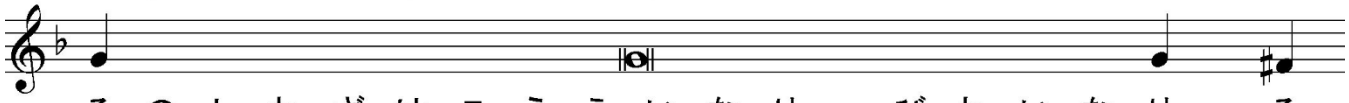

てわれらをすくいたまえ。
我等救給

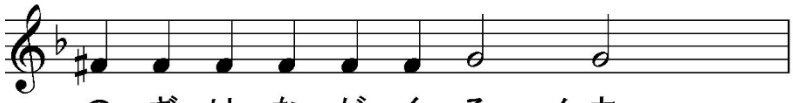

およそこれをあいするもののためにしたう
凡之愛者爲慕

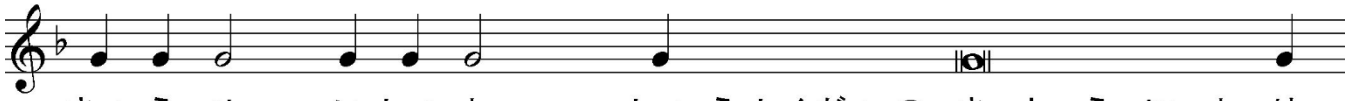

べし。

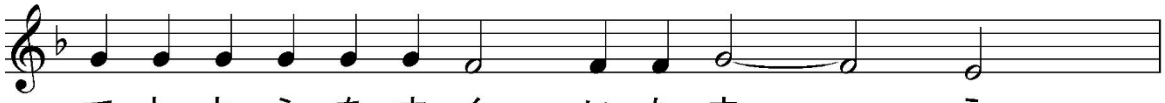

きゅうせいしゅよ、しょうしんぢょのきとうにより
救世主生神女祈祷因

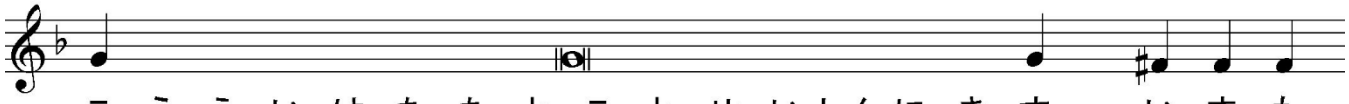

てわれらをすくいたまえ。
我等救給

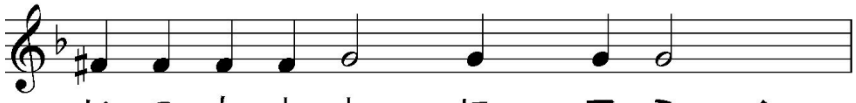

そのしわざはこうえいなり、びれいなり、そ
其所爲光榮美麗

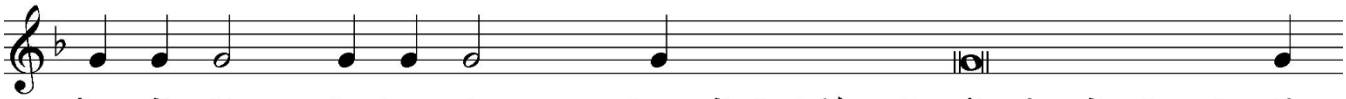

のぎはながくそんす。
義永存

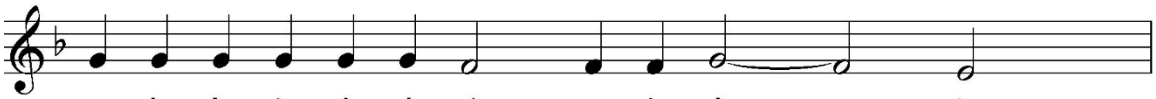

きゅうせいしゅよ、しょうしんぢょのきとうにより
救世主生神女祈祷因


てわれらをすくいたまえ。
我等救給


こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光榮父子聖神歸今

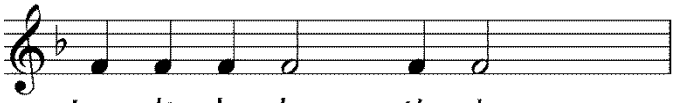

いつもよよに、アミン。
何時世世



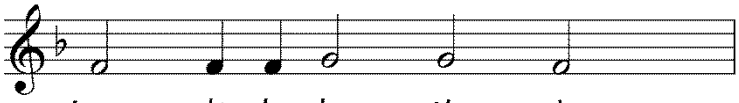


【 小聯禱 】

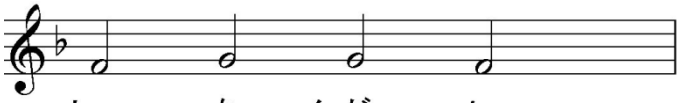
司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、



司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、



司祭) 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會の充滿を守り、爾が堂の美なるを愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光榮し、我等爾を恃む者を遺す勿れ、)

司祭) 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

【 第二アンティフォン 】

かみをおそれ、そのいましめをきわめてあい
神　畏　其　誡　極　愛

するひとはさいわいなり。
人　福

どうていぢょよりうまれしかみのこよ、わ
童　貞　女　生　神　子　我

れらなんぢにアリルヤをうたうものをすくい
等　爾　歌　者　救

たまえ
給

そのすえはちにちからあり、せいちょくのもの
其　裔　地　力　正　直　者

のぞくはしゅくふくせられん。
族　祝　福

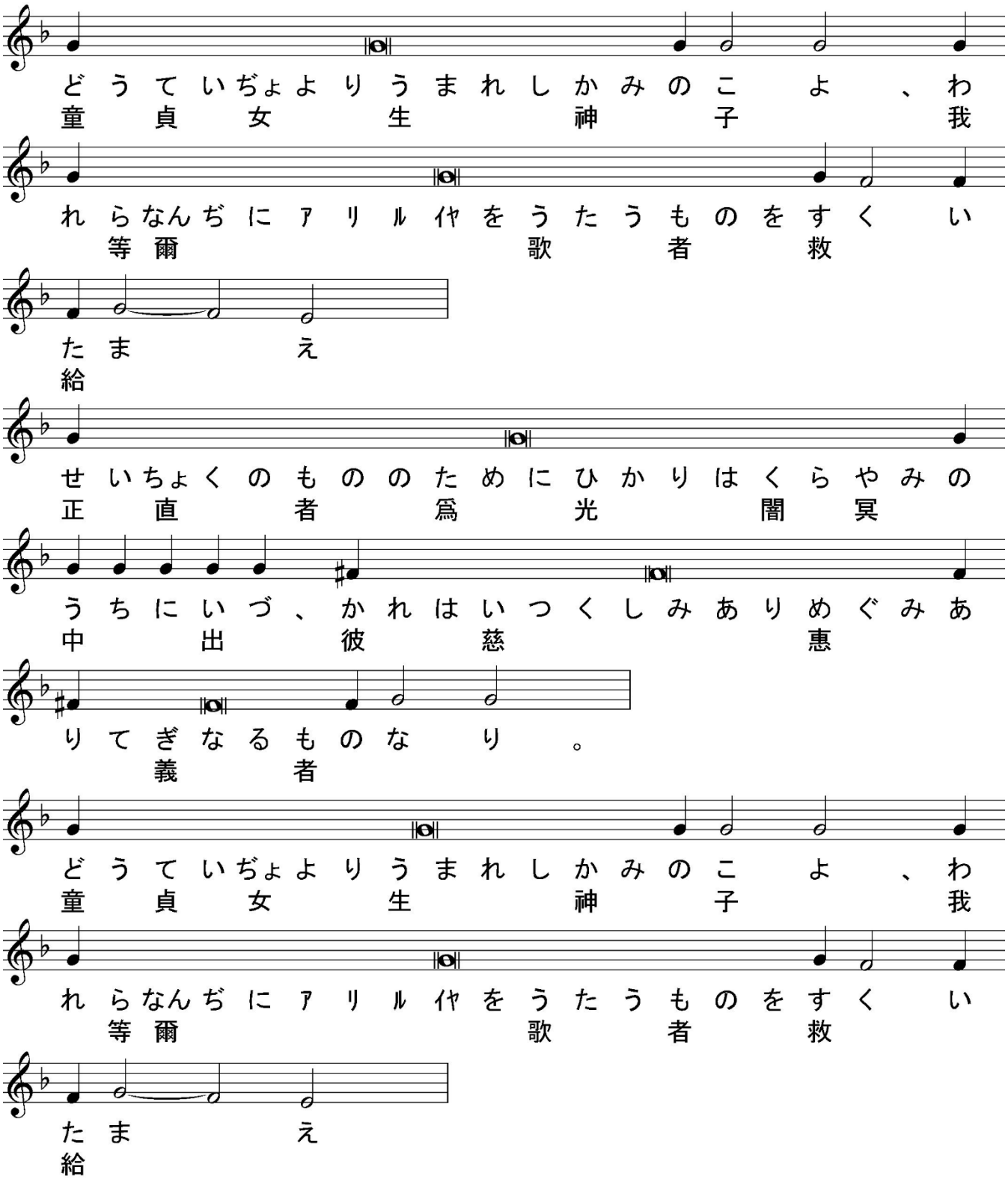
どうていぢょよりうまれしかみのこよ、わ
童　貞　女　生　神　子　我

れらなんぢにアリルヤをうたうものをすくい
等　爾　歌　者　救

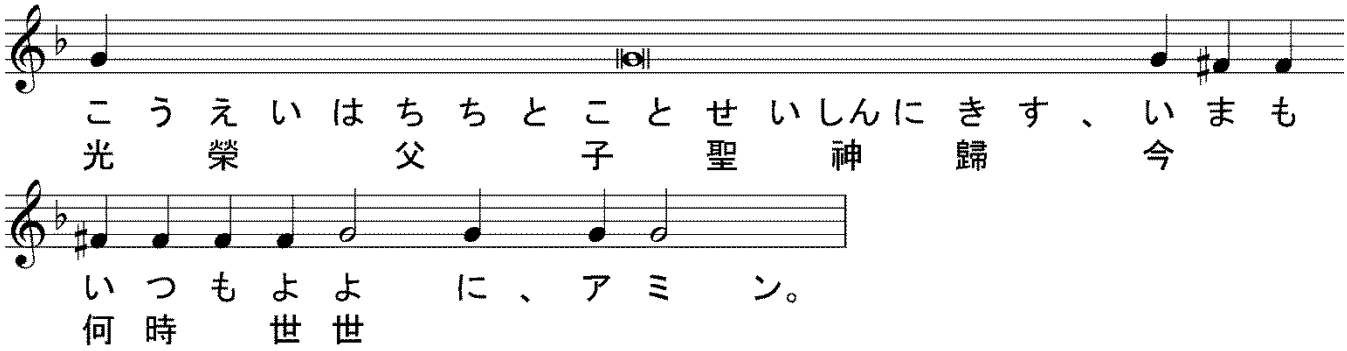
たまえ
給

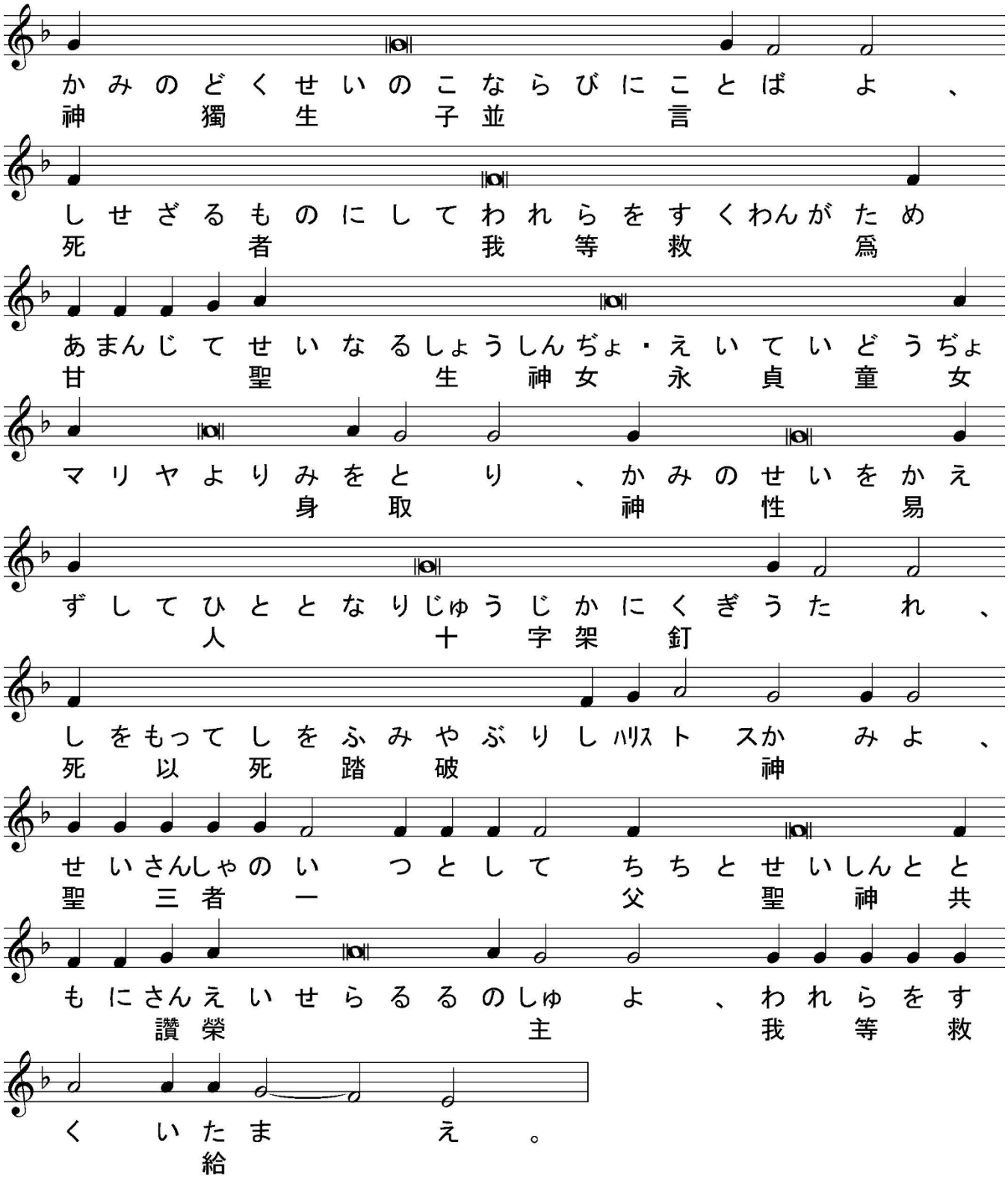
とみとたからとはそのいえにあり、そのぎは
富　財　其　家　其　義

ながくそんす。
永　存


どうていぢょよりうまれしかみのこよ、わ
童貞女生神子我
れらなんぢにアリルヤをうたうものをすくい
等爾歌者救
たまえ
給
せいちょくのもののためにひかりはくらやみの
正直者爲光闇冥
うちにいづ、かれはいつくしみありめぐみあ
中出彼慈惠
りてぎなるものなり。
義者
どうていぢょよりうまれしかみのこよ、わ
童貞女生神子我
れらなんぢにアリルヤをうたうものをすくい
等爾歌者救
たまえ
給

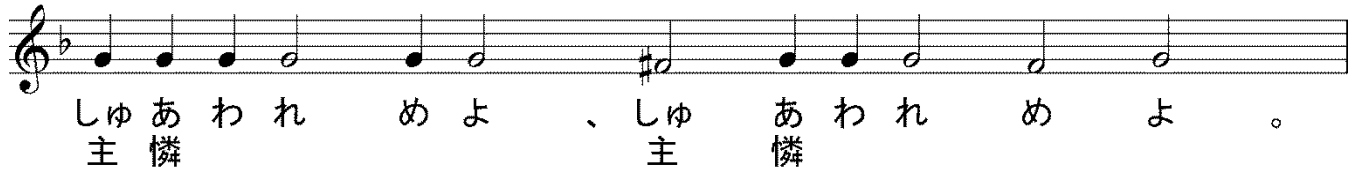
【　神の獨生の子　】


こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光榮父子聖神歸今
いつもよよに、アミン。
何時世世



【 小聯禱 】

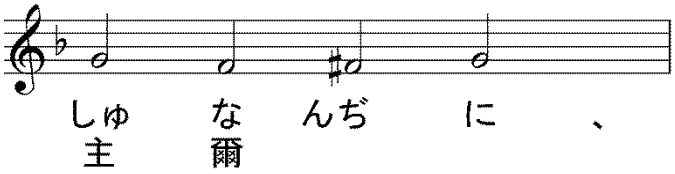
司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、



司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、

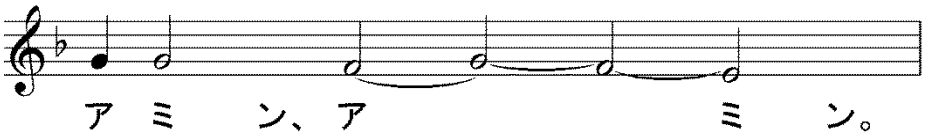
至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

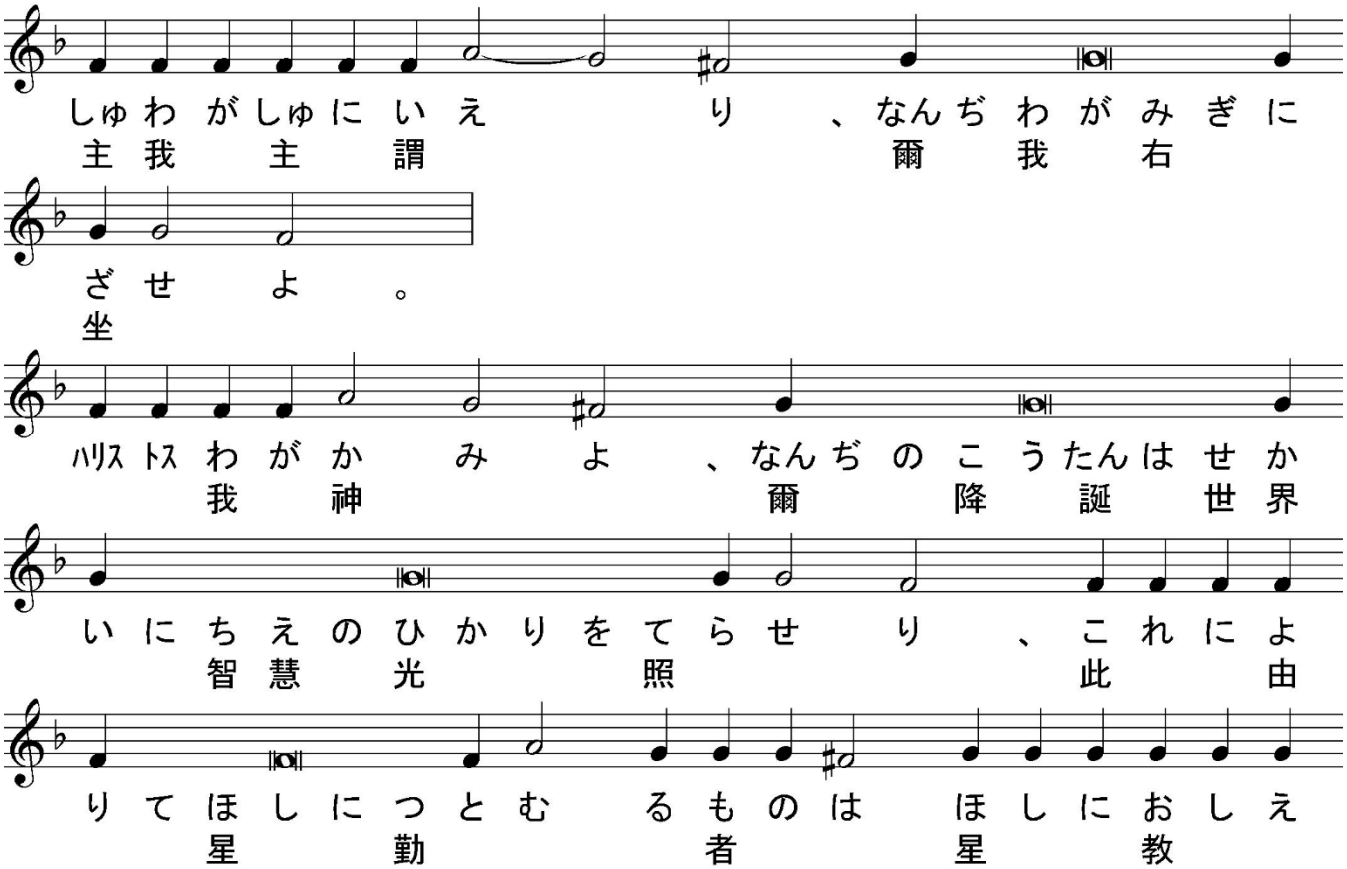


司祭)（ 黙誦：我等に此の公同和合の祈禱を賜い、曾て二三人爾の名に依りて集まる者にも其求むる所を賜うを約せし主よ、爾親ら今も爾が諸僕の願を其利益の爲に應わしめて、我等に今世には爾の眞理を識り、來世には永遠の生命を得るを給え、 ）

司祭) 蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、



【 第三アンティフォン 】



ら れて 、なんぢぎのひをおが み 、
爾 義 日 拝

なんぢうえよりのひがしをさとれ り 。
爾 上 東 覚

しゅよ、こうえいはなんぢにき す 。
主 光 榮 爾 歸

わがなんぢのて き を なんぢのあしのだいと
我 爾 敵 爾 足 台

なすにいた れ 。
爲 迄

ﾊﾘｽﾄｽわがか み よ 、なんぢのこうたんはせか
我 神 爾 降 誕 世 界

いにちえのひかりをてらせ り 、これによ
智 慧 光 照 此 由

りてほしにつとむ るものは ほしにおしえ
星 勤 者 星 教

ら れて 、なんぢぎのひをおが み 、
爾 義 日 拝

なんぢうえよりのひがしをさとれ り 。
爾 上 東 覚

しゅよ、こうえいはなんぢにき す 。
主 光 榮 爾 歸

しゅはｼﾎﾝよりなんぢがのうりょくのつえをつか
主 爾 能 力 杖 遣

わさん、なんぢはそのてきのうちにしゅたる
爾 其 敵 中 主

べし。

ハリストスわがかみよ、なんぢのこうたんはせか
我 神 爾 降 誕 世 界

いにちえのひかりをてらせり、これによ
智 慧 光 照 此 由

りてほしにつとむるものはほしにおしえ
星 勤 者 星 教

られて、なんぢぎのひをおがみ、
爾 義 日 拝

なんぢうえよりのひがしをさとれり。
爾 上 東 覚

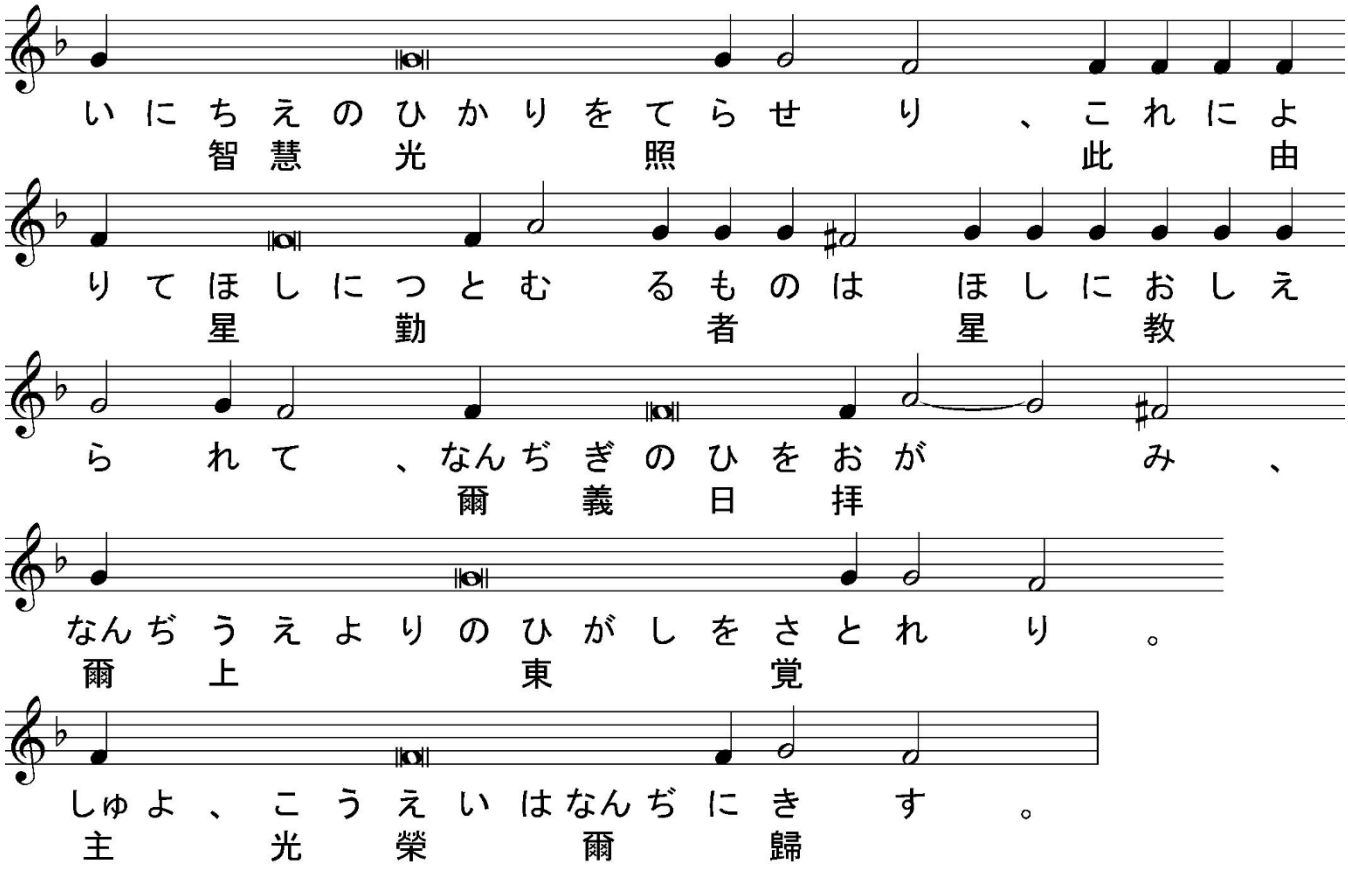
しゅよ、こうえいはなんぢにきす。
主 光 榮 爾 歸

なんぢがのうりょくのひにおいて、なんぢの
爾 能 力 日 於 爾

たみはせいなるびれいをもってそなえられた
民 聖 美 麗 以 備

り。

ハリストスわがかみよ、なんぢのこうたんはせか
我 神 爾 降 誕 世 界



司祭)（ 黙誦：主宰・主・我等の神、諸天に天使及び、天使首の品級と軍隊とを立て

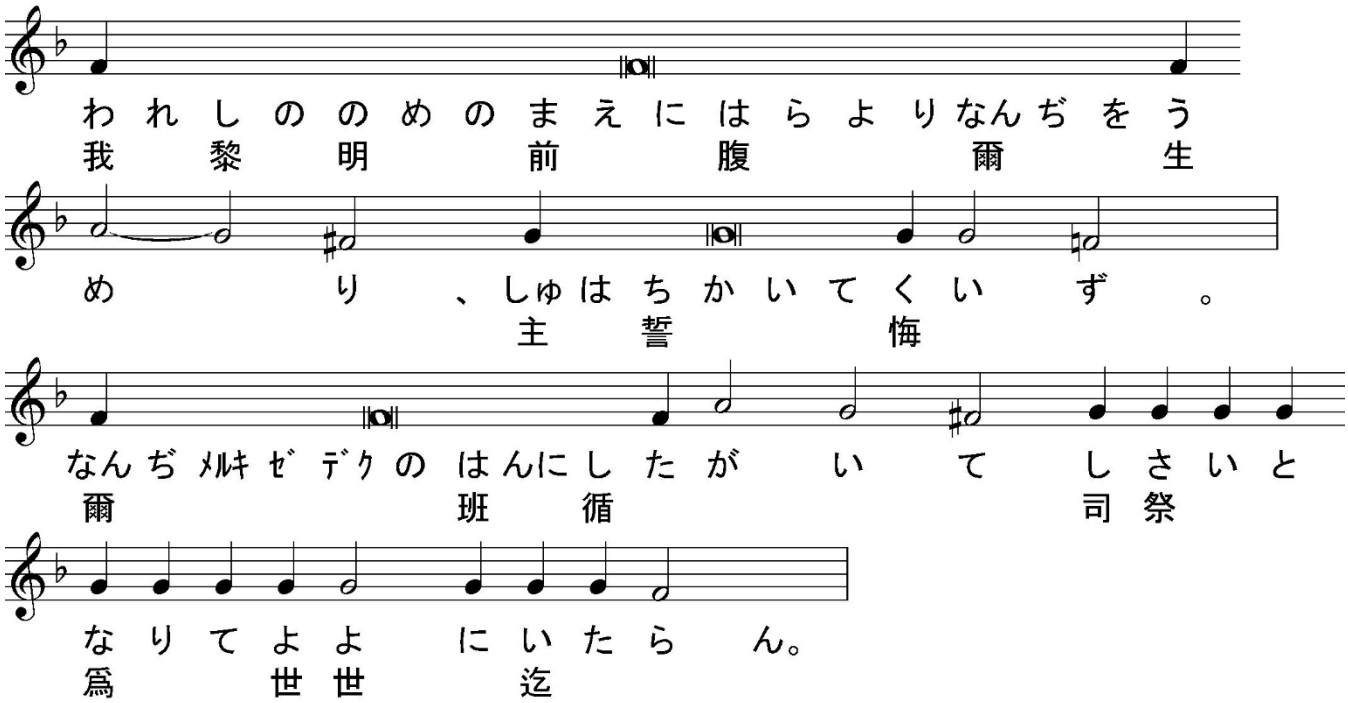
て爾が光榮の奉事者となしし者よ、求む我等の入るに伴いて、彼の我等と

偕に務め、共に爾の至善を讃榮する聖天使等の入るを致させ給え、蓋、凡

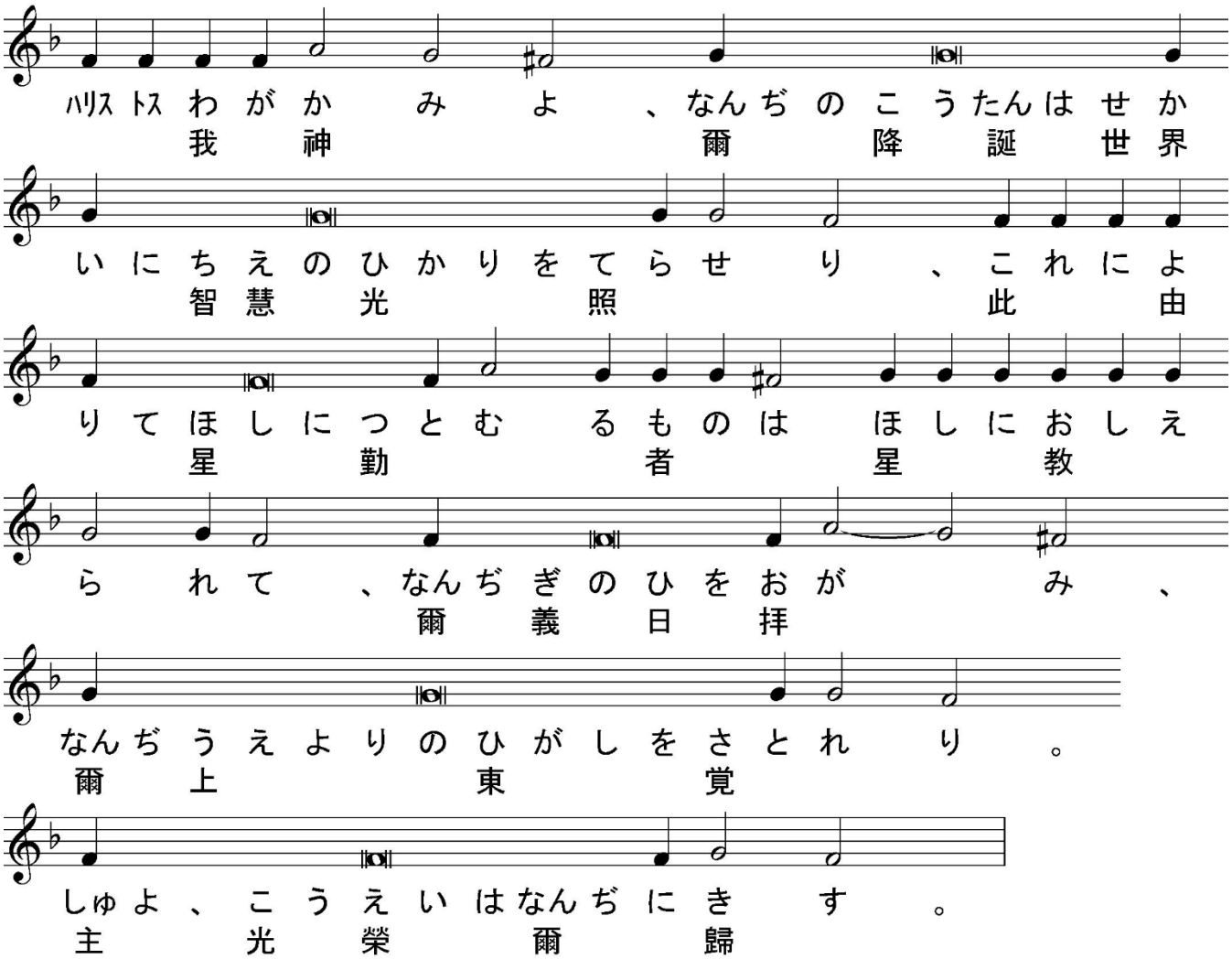
そ光榮尊貴伏拝は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、 ）

司祭) 睿智、粛みて立て、

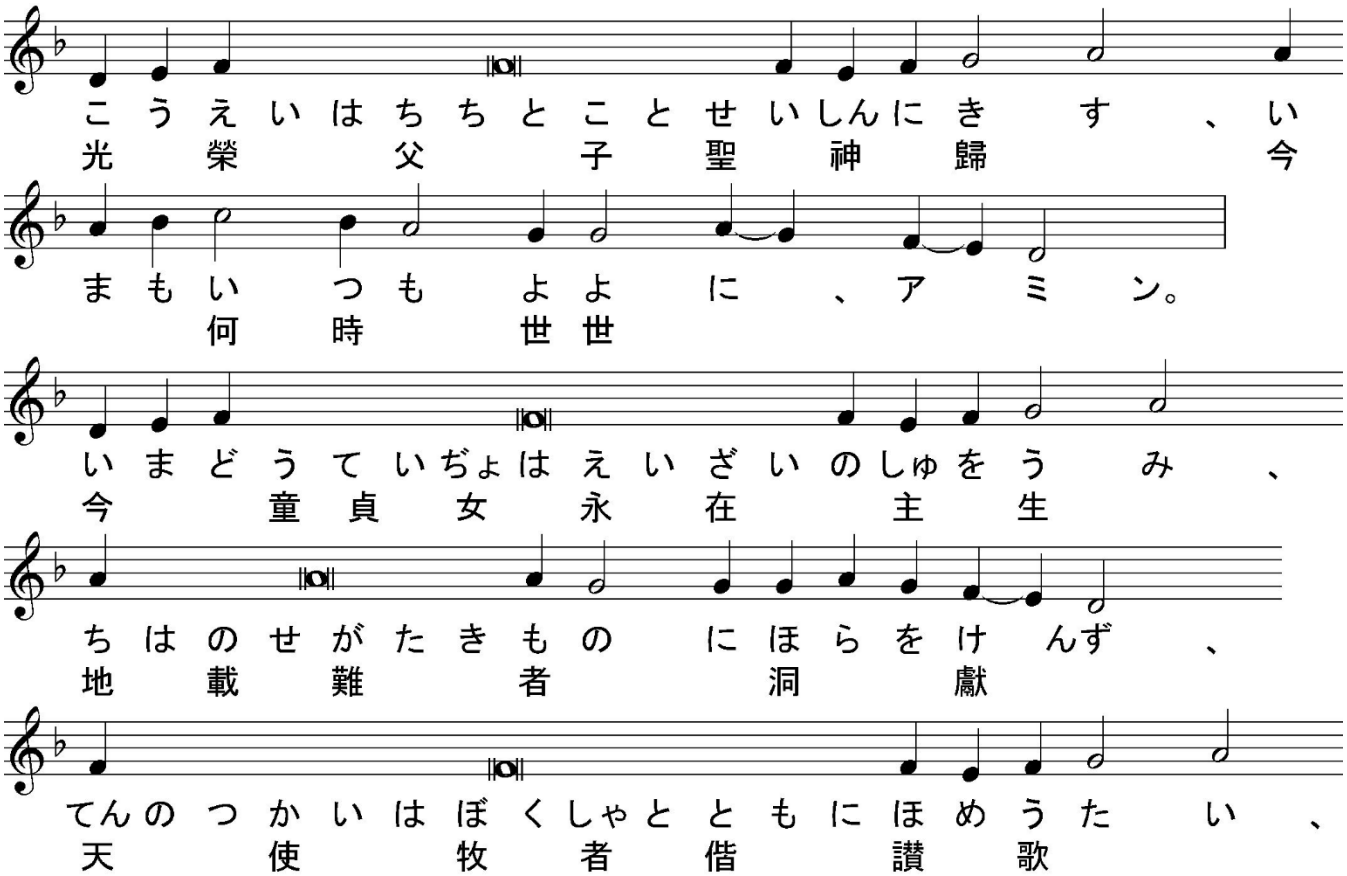
【 聖入の句 】



【　降誕祭のトロパリ　第４調　】

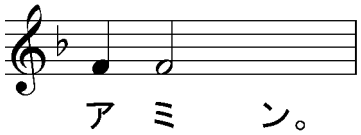


【　降誕祭のコンダク　第３調　】

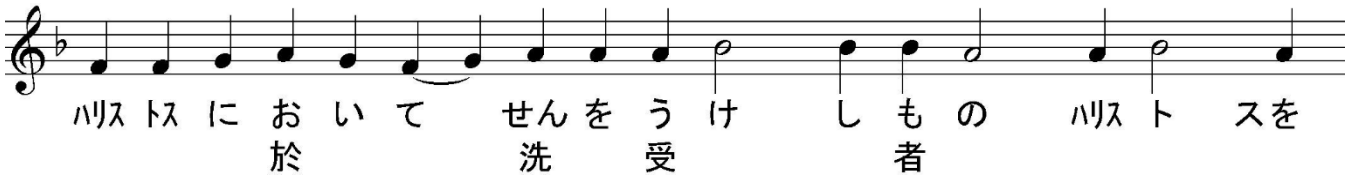


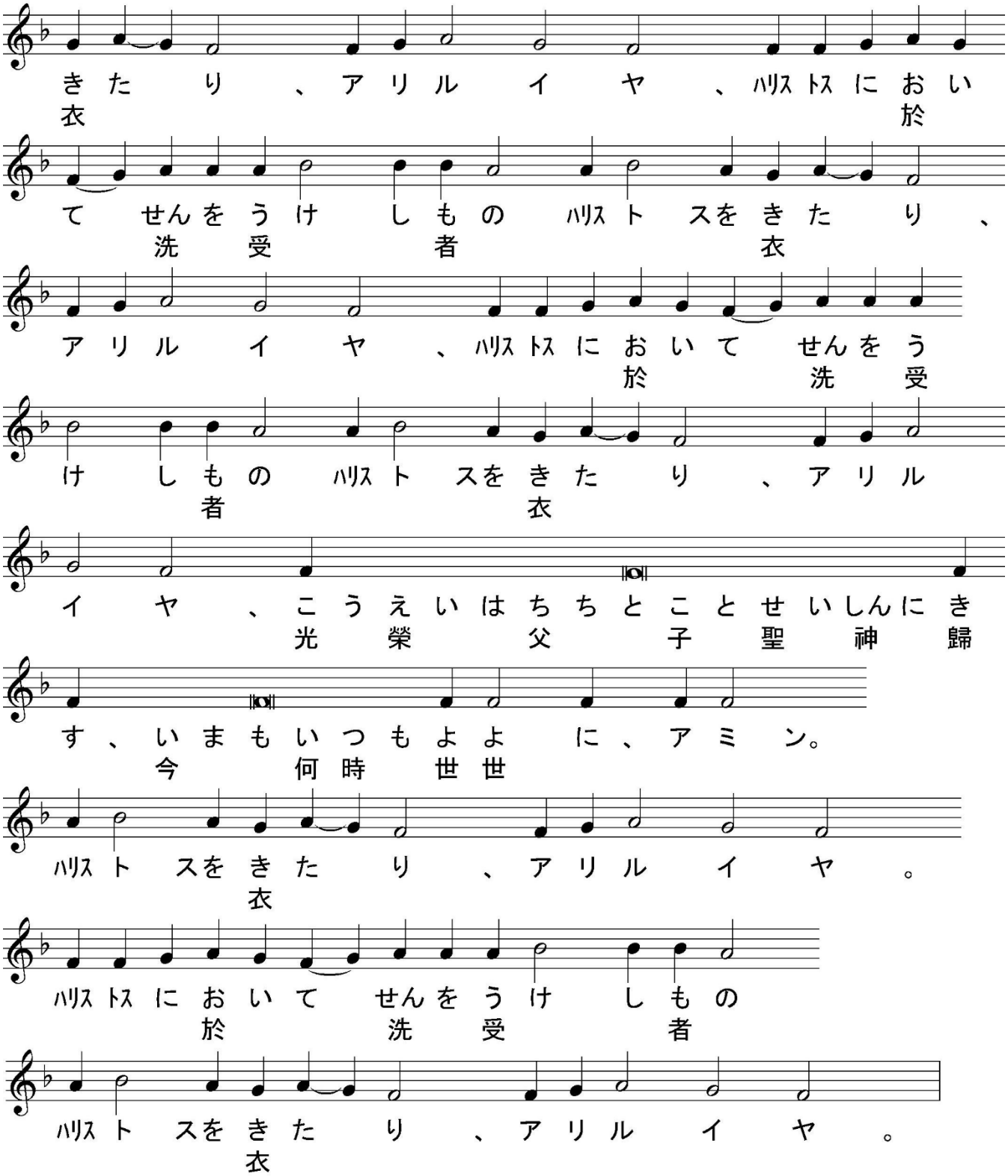
司祭）（ 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 ）

司祭） **蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、**



【 聖三祝文に代えて 】





司祭)（ 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 ）

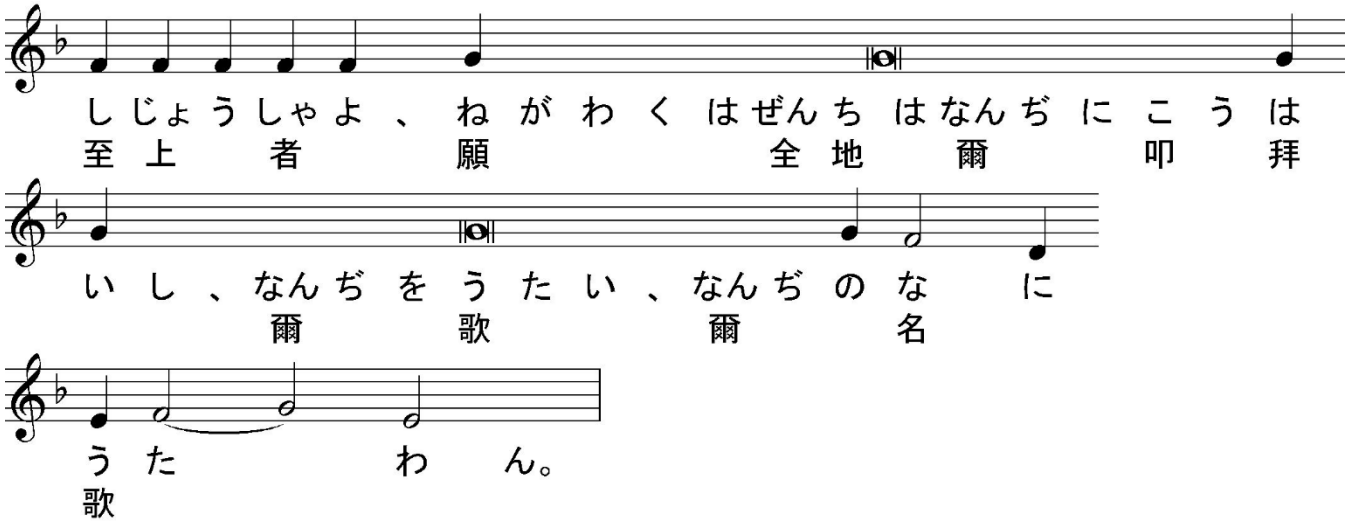
【 提綱 第4調 】

司祭) 愼みて聽くべし、衆人に平安、

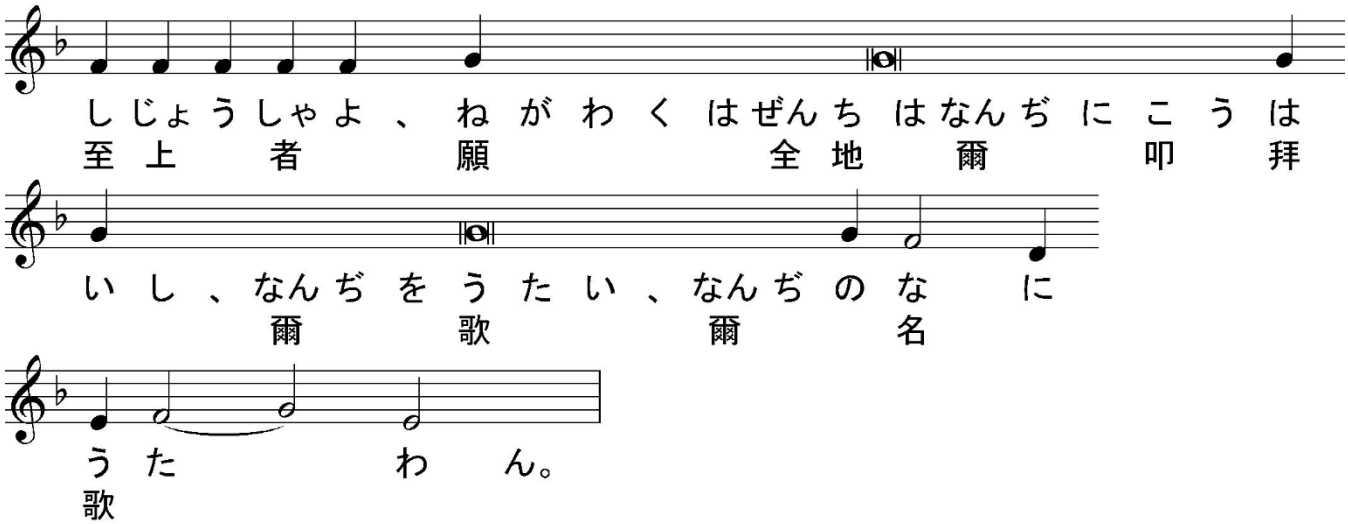
誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

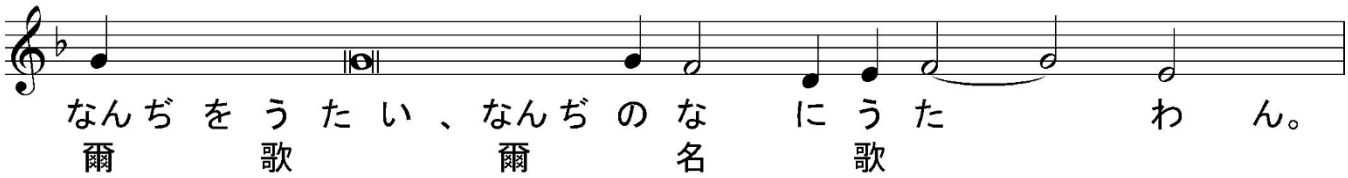
誦經）プロキメン、至上者よ、願わくは全地は爾に叩拜し、爾を歌い、爾の名に歌わん、



誦經）全地よ、神に歓びて呼び、其名の光榮を歌い、光榮と讃美とを彼に歸せよ、



誦經）至上者よ、願わくは全地は爾に叩拜し、



【 使徒經 209端 ガラティヤ書4章4〜7節 】

司祭）睿智、

誦經）聖使徒パヴェルがガラティヤ人に達する書の讀、

司祭）謹みて聽くべし、

誦經）兄弟よ、期満つるに至りて、神は其子を遣し、彼は女より生れ、律法下の者となれり、律法下の者を贖い、我等をして子たるを得しめん爲なり。且爾等子たるに由りて、

神(かみ)は爾等(なんぢら)の心(こころ)に其子(そのこ)の神(しん)、「アッヴァ」父(ちち)を呼(よ)ぶ者(もの)を遣(つか)わせり。故(ゆえ)に爾既(なんぢすで)に僕(ぼく)ならず、乃子(すなわちこ)なり、若(も)し子(こ)ならば、イイススハリストスに由(よ)りて神(かみ)の嗣(よつぎ)なり。

＊＊

（比較用　口語訳）しかし、時の満ちるに及んで、神は御子を女から生れさせ、律法の下に生れさせて、おつかわしになった。 それは、律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。 このように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に、「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。 したがって、あなたがたはもはや僕ではなく、子である。子である以上、また神による相続人である。

＊＊

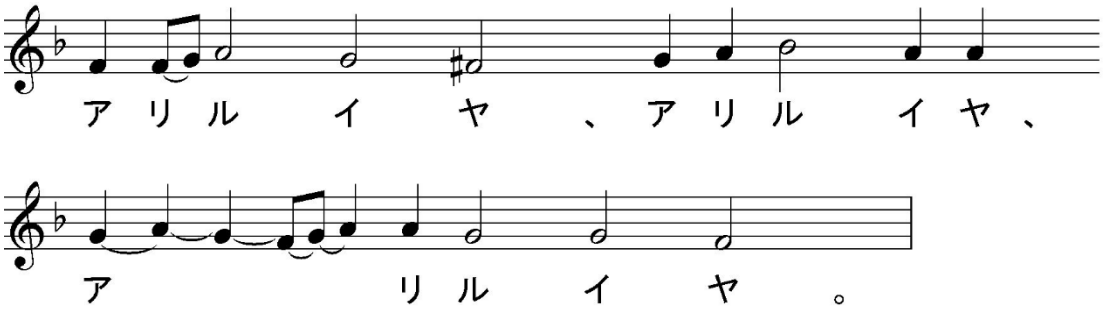
【　アリルイヤ　第1調　】

司祭）爾(なんぢ)に平安(へいあん)、

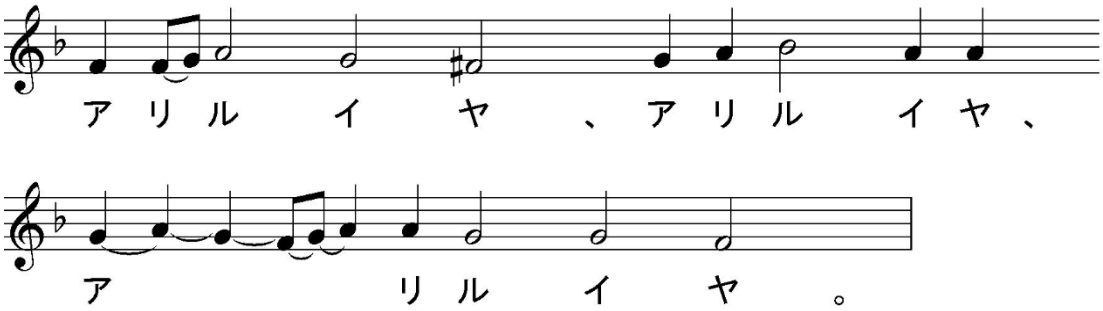
誦經）爾(なんぢ)の神(しん)にも、

司祭）睿智(えいち)、

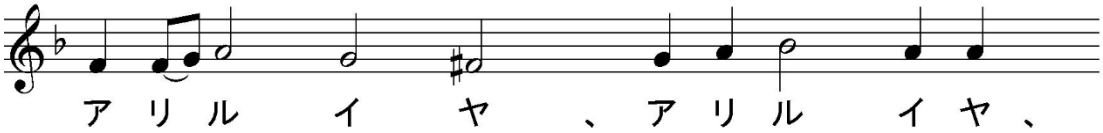
誦經）アリルイヤ、

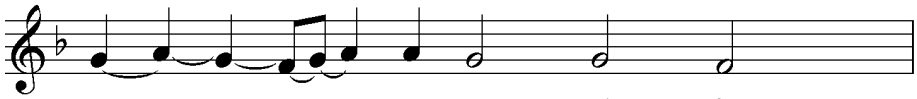


誦經）諸天(しょてん)は神(かみ)の光榮(こうえい)を傅(つた)え、穹蒼(おおぞら)は其手(そのて)の作爲(しわざ)を詰(つ)ぐ、



誦經）日(ひ)は日(ひ)に言(ことば)を宣(の)べ、夜(よ)は夜(よ)に智(ち)を施(ほどこ)す、

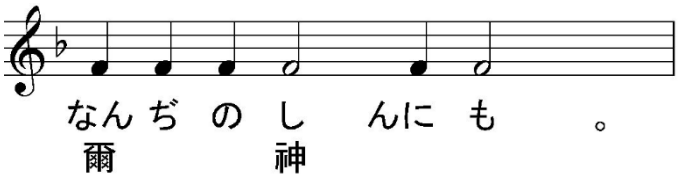




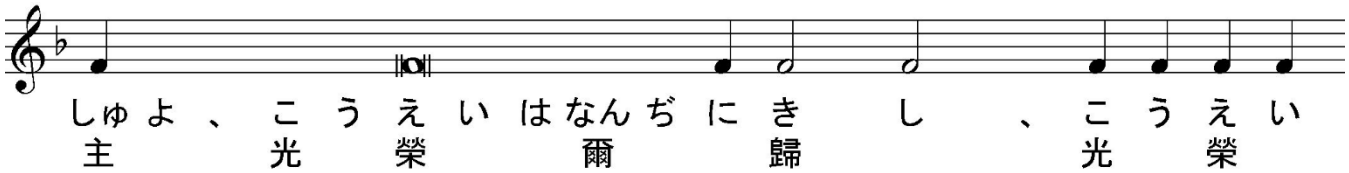
司祭)（ 黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誡を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。 ）

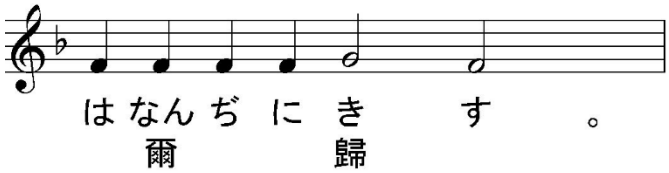
【 福音經（エヴァンゲリオン） マトフェイ福音書3端 2章1〜12節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聽くべし、衆人に平安、



司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、





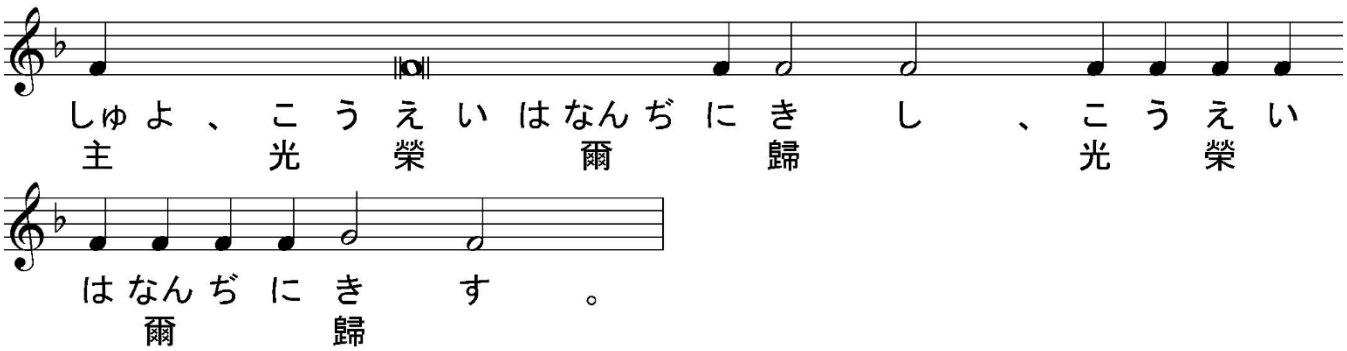
司祭) 謹みて聽くべし、イイススはイロド王の時イゥデヤのヴィフレエムに生れしに、視よ、博士數人東よりイェルサリムに來りて曰く、生れたるイゥデヤ人の王は何處に在るか、蓋我等其星を東に見たれば、彼を拜せん爲に來れり。イロド王之を聞きて心騷げり、イェルサリム擧りて亦然り。乃凡の司祭長と民間の學士とを集めて、彼等に問えり、ハリストスは何處に生るべきか。彼等曰えり、イゥデヤのヴィフレエムに於てす、蓋預言者に因りて斯く録されたり、云く、イゥダの地ヴィフレエムよ、爾はイゥダの諸郡の中に於て聊も小しとせず、蓋爾より我が民イズライリを牧せんとする君は出でんと。是

に於てイロド密に博士を召し、詳に星の現れし時を問い、彼等をヴィフレエムに遣して曰えり、往きて、細に嬰兒の事を尋ね、之に遇わば、我に告げよ、我も往きて彼を拜せん爲なり。彼等王に聞きて往けり、視よ、嘗て東に見たる星は彼等に先だちて行き、遂に嬰兒の在る所に至りて、其上に止れり。彼等星を見て喜に勝えざりき。乃家に入りて、嬰兒の其母マリヤと偕に在るを見、俯伏して彼を拜し其寶盒を啓きて、之に禮物を獻じたり、即黄金、乳香、沒藥なり。既にして夢の中に、イロドに返る可からずとの黙示を得て、他の途より其本地に歸れり。

＊＊

（比較用　口語訳）イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき、見よ、東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った、「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拜みにきました」。 ヘロデ王はこのことを聞いて不安を感じた。エルサレムの人々もみな、同様であった。 そこで王は祭司長たちと民の律法学者たちとを全部集めて、キリストはどこに生れるのかと、彼らに問いただした。彼らは王に言った、「それはユダヤのベツレヘムです。預言者がこうしるしています、『ユダの地、ベツレヘムよ、おまえはユダの君たちの中で、決して最も小さいものではない。おまえの中からひとりの君が出て、わが民イスラエルの牧者となるであろう』」。そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、星の現れた時について詳しく聞き、 彼らをベツレヘムにつかわして言った、「行って、その幼な子のことを詳しく調べ、見つかったらわたしに知らせてくれ。わたしも拜みに行くから」。彼らは王の言うことを聞いて出かけると、見よ、彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで、幼な子のいる所まで行き、その上にとどまった。 彼らはその星を見て、非常な喜びにあふれた。 そして、家にはいって、母マリヤのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏して拜み、また、宝の箱をあけて、黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた。そして、夢でヘロデのところに帰るなとのみ告げを受けたので、他の道をとおって自分の国へ帰って行った。

＊＊



※聖体礼儀③（金口イォアン）へ